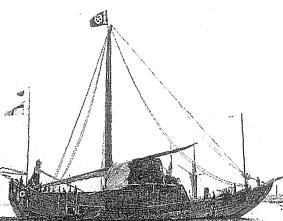
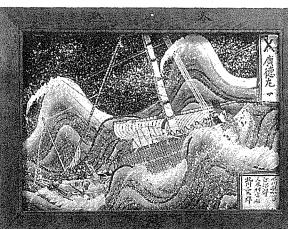


冬仏壇と夏仏壇（忠谷久五郎家）

いてあり、現在でもこうした例が四件残っています。その大きいほうを「冬仏壇」、小さいほうを「夏仏壇」と呼んでいます。これは、「冬仏壇」は当主が航海から戻り居間に居る冬場や報恩講や法事など重要なときのみに使用し、「夏仏壇」は当主が航海で家を留守にする春から秋にかけて女性や子どもが毎日のお勤めに使用したことからこう呼ばれています。こうした仏壇の使い分けは、北前船の暮らしにちなんだものであり、橋立集落における特徴といえます。



北前船で使用された弁才船「奉貴丸」



船絵馬「廣徳丸海難図」（御木神社奉納）

加賀橋立は石川県の南西端、加賀市の沿岸部に位置し、近世から近代にかけて大阪から瀬戸内海や日本海の港に寄港し、交易を行ながる北海道まで航海した「北前船」の船主たちのふるさととして栄えました。最盛期には船主三四名や船頭八名など北前船にかかわる人々が居住し、集落には船主や船頭の豪壮な家屋や特色ある町並みが今も残つており、平成一七年一二月二七日に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

人々が居住し、集落には船主や船頭の豪壮な家屋や特色ある町並みが今も残つており、平成一七年一二月二七日に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

橋立に限らず、北前船ゆかりの地では、船主や船乗りが航海の安全祈願や無事帰郷できることを感謝して、船の絵が描かれた絵馬を奉納する慣習がありました。現在も橋立集落の出水神社には奉納された絵馬が一七枚残されています。

このように、船乗りたちが神仏に対してもつた信仰心をもつて、航海での海難が多かつたからだといわれています。それは、和船（弁才船）が現代の船と違つて、浸水を防ぐ甲板をもつていて、かつたことが第一の原因でした。当時の和船は、荷物を船底から表まで高く積み上げました。これを「山を取る」といい、水ぬれを防ぐため、「こも」や「とま」をかぶせていました。この形は荷物の積み下ろしには便利ですが、大波を受けた

ところ、橋立集落が北前船で栄えたころは各家で競つて豪華な仏壇を備えていました。そのためかつては「仏壇は一番最後に入つて、一番最初に出て行く」といわれました。仏壇はとても高額だったので、各家では最もはぶりのよいときには、最もまとまった資金源として真っ先に売られたからでしょう。

集落の中心部にある真宗大谷派橋立支院は、元は因随寺といい蓮如の遺戒を守る寺院でした。しかし因随寺は、明治五年の大火で焼失してしまいます。その後、住職芳原大住が再建にあたりますが遅々として進まず、明治一年、住職は寺から去り、無住の寺となってしまいます。その後、因随寺が願成寺（大聖寺城下）の下寺であったことから、願成寺説教所として復興することも考えられましたが、最終的には、明治二年、信徒の協議に基づき、真宗大谷派福井別院の支院となりました。

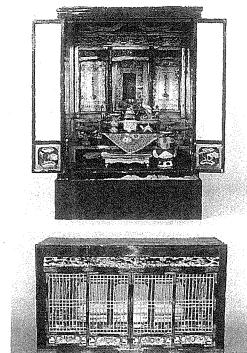
また、設立に際しては、士分格をもつた西出家や増田家をはじめ、信徒である橋立の北前船主が多く寄進を行っています。内陣・外陣境の欄間彫刻に一〇名の橋立の北前船主が寄進者として記され、本堂が橋立の有力船主の寄進によって建立されたことがあらためて確認できます。この橋立支院は、現在でも住職が不在ですが、先祖の意思を受け継いだ地元橋立集落の人々によって、今も大切に維持され

ています。

このように、船絵馬や船仏壇など北前船にちなんだ慣習、住職が不在でも本堂を建立した船主たちの財力と信仰心、危険と隣り合はずの航海に挑んだ挑戦的精神は、地元では「北前魂」と呼ばれている大切なものです。

加賀橋立は、まだ重伝建地区として始まつたばかりで、建造物の修理もこれからですが、町並みの保存とともに、北前船主たちの「北前魂」も地元の人々によつて後世に継承されいくことを願つています。

石川県加賀市 せんしゅ 船主集落における神仏信仰

船仏壇
(所蔵: 加賀市北前船の里資料館)

橋立北前船主の寄進により建立した橋立支院

た。しかし因随寺は、明治五年の大火で焼失してしまいます。その後、住職芳原大住が再建にあたりますが遅々として進まず、明治一年、住職は寺から去り、無住の寺となってしまいます。その後、因随寺が願成寺（大聖寺城下）の下寺であったことから、願成寺説教所として復興することも考えられましたが、最終的には、明治二年、信徒の協議に基づき、真宗大谷派福井別院の支院となりました。

また、設立に際しては、士分格をもつた西出家や増田家をはじめ、信徒である橋立の北前船主が多く寄進を行っています。内陣・外陣境の欄間彫刻に一〇名の橋立の北前船主が寄進者として記され、本堂が橋立の有力船主の寄進によって建立されたことがあらためて確認できます。この橋立支院は、現在でも住職が不在ですが、先祖の意思を受け継いだ地元橋立集落の人々によって、今も大切に維持され



塩田津中町東側の景観：西岡家住宅（手前）と杉光陶器店（奥）

みながら作業させていた大学の研究室の皆様へ、
帳面の整理をされるなど、限られた時間を惜しまず、
に深く感謝を申し上げます。

塩田津の歴史的建造物は、何度も床上浸水の被害を受けてきました。日々、これらの建造物が幾多の風雪に耐えながら生き続けてきたことを目の当たりにするとともに、受け継ぐことの責務の大ささを痛感しているところで、
私たちが見習うべき教訓が随所にみられる

でお話会、中庭で餅つきを行い、子どもたちをはじめとする参加者に文化財に対する啓発を行っています。また、地元の市立塩田小学校では、町並みを舞台に総合学習の授業を行っており、町並みや川港の活用について数か月かけて準備した意見や提案を発表し、地元住民との交流を図っています。

「町づくりは人づくり」といわれるよう、「塩田津の町並み保存と将来の後継者育成につながると信じております。



川溝の景観「大正時代」



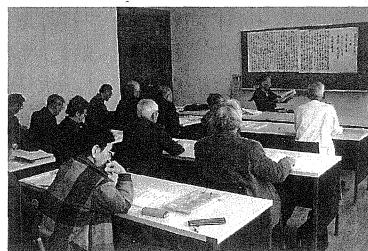
旧長崎街道（右側）沿いの景観「大正時代」

でお話会、中庭で餅つきを行い、子どもたちをはじめとする参加者に文化財に対する啓発を行っています。また、地元の市立塩田小学校では、町並みを舞台に総合学習の授業を行っており、町並みや川港の活用について数か月かけて準備した意見や提案を発表し、地元住民との交流を図っています。

「町づくりは人づくり」といわれるよう、「塩田津の町並み保存と将来の後継者育成につながると信じております。

昭和四九年に国の重要文化財に指定された西岡家住宅と平成一〇年に国の登録有形文化財となつた杉光陶器店が軒を連ねる中町を移とし、江戸後期に建設された「居蔵家」と呼ばれる町家が重厚な景観を形成しており、これに塩田石工によって造られた石垣や王像・恵比寿像、樹木などが加わつて良好な歴史的風致を構成しています。

塩田津に關する私どもの知識は、その大半が杉光和雄さんから学びました。杉光さんは、大正一五年生まれの八〇歳、身の丈六尺二寸、足が一二文もある「町並み研究会」の会長で、登録有形文化財「杉光陶器店」の当主です。重要文化財西岡家住宅をはじめ、塩田津の今昔を來訪者に熱く語ら



前国風土記》にみえるのが最初で、「藤津郡」の項に「潮高満川」に由来する「塙田川」として記されています。有明海の潮が満つる意とされ、塙田津は有明海から遡流する塙田川の川港と長崎街道が育んだ商家町として、藩政期には蓮池藩の西目統治の拠点として栄えました。

れる塩田満の生き守りです。ときに、この住宅の座敷までも見学を許され、座をくずしての塩田説議が始まります。伝統的建造物群保存対策調査の導入についても早くからご指摘をいただき、制度の導入や保存物件の同意の際には、私たちとともに一軒一軒説明に赴いては、対象地区の意識をまとめられた功労者

佐賀県嬉野市塩田町
先人が残してくれた
「塩田津らしさ」

町並み保存に係る活動については、平成二年、「塙田塾」を母体とする「塙田職人組合」や平成二年に発足した「町並み研究会」があります。

また、加悦では江戸時代中期から天満神社の祭礼に伴う屋台行事が始まり、加悦の上乃町など五地区ではそれぞれ歌舞伎や狂言を上演する豪華な芸屋台、御神体を乗せた山屋台、お囃子や神楽などがさかんに上演されました。長くいをみせて います。



天満神社祭礼・神輿練り歩き

の「誇り」がぜひとも必要になってしまいます。自分たちが住む地域を「誇り」に思えないところ、町並みの保存はなかなか難しいのではないかと思います。それから、町並み地区をもつと外の人たちに知つてもらおうという趣旨で、「ちりめん街道まる」と「ミュージアム」というイベントが平成一〇年から開催されています。毎年、秋の一日、街道筋を会

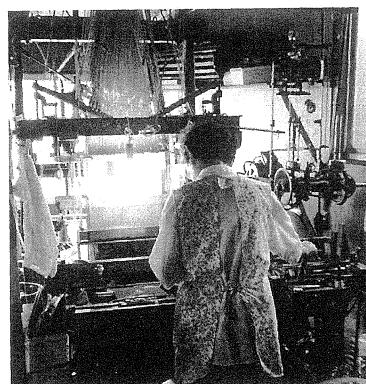
保存地区の下乃町には小さな水路が流れています。それまでは住民に見向きもされなかつた水路ですが、あるときそこには「バイクモ」と呼ばれる水草が繁茂していることが発見されました。その水草はきれいな水が流れていらないと生きていけないので、それからはこの水路の水質に人々の関心が集まるようになりました。

から地域の歴史、特に江戸時代から昭和初期までの地域社会の移り変わりを学習してきました。その過程で住民にも町並みの大切さが次第に認識されるようになり、街道塾では「わしはここに住むことを誇りに思う」と発言される方も出るようになりました。

伝統的な町並みを保存していくには、地域住民みずから地域固有の歴史や文化を認識することから始まり、それを踏まえて住民として

が引かれる四月下旬、天満神社の一〇〇段に及ぶ石階段を重厚な神輿が人々に担がれて降りてきます。今日、芸舞台で歌舞伎や狂言は上演されませんが、神輿は地区内を練り歩き、神樂の笛や太鼓の音が街道筋に響き渡り、人々は春の訪れを実感します。

そして、人々が心待ちにしている加悦谷祭が終わり、五月に入るとあちこちで田植えが始まっています。



母後縮緬を織

さらには、「ちりめん街道」と呼ばれるようになります。しかし、これは街道筋で縮緼を織る機音が響き渡つてのちりめん街道なので、なんとかしてこの機音を存続させることができないものか、知恵をしぼっています。

このように、与謝野町加悦地区では伝統的建造物の保存から始まって、単に古い建物の保存だけでなく、地域連帯感の醸成、祭りの存続、水路の浄化、機音の継続、後継者、空家などさまざまな問題に人々の関心が広まってきたおり、今後はそれらの課題を一つひとつ住民みずから解決していくことが求められています。

伝統的建造物群保存地区を見つめる住民のまなざし

京都府与謝野町加悦は、京都府北部丹後半島のつけ根にあり、その南には丹後と丹波を画する大江山連峰がそびえています。加悦は古代より丹後と近畿中央部を結ぶ交通の要衝として栄え、その中心にはかつて「京街道」と呼ばれ、丹後と京都を結んだ街道が走っています。

さて、加悦は中世には武士の躰地などに使用された「丹後精好」と呼ばれる絹織物の生産地として、また、江戸時代中期からは高級絹織物である「丹後縮緬」の主産地となりました。今日、保存地区内には江戸時代後期から昭和初期にかけて建てられた縮緬生産商家、と呼ばれるようになりました。

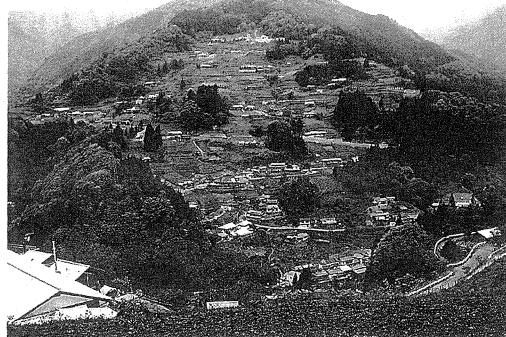
塗喰の白壁に彩られたちりめん格子や虫籠(むしこ)窓ある加悦保存地区の町並み：花組地区(上)と中市地区
旅館、酒蔵、役場などの建物が数多く残されています。さらに、地区の中心にある天神山には天満神社が鎮座し、その山麓には淨土宗・臨済宗・日蓮宗の各寺院が集中して寺町を形成しています。このように、加悦保存地区は近世以来丹後編纏とともに発展してきました。

京都工芸織維大学による町並み現状調査が実施されてからで、実際に住民が町並みの大切さを認識し始めたのは、平成一〇年ごろからです。一三年には地域住民を中心にして「ちりめん街道を守り育てる会」が組織化され、統一デザインの暖簾づくり、ちりめん街道上着・法被の製作、「ちりめん街道まる」というミュージアムイベントなど多彩な取組が始まりました。街道上着は女性向き、法被は男性用で、イベントや先進地視察に行く際に着用しており、暖簾とともに地域住民により一体感を高めることでねらいです。さらに、地域の歴史を学習



「ちりめん街道まるごとミュージアム」で子ども歌舞伎を上演

このように、与謝野町加悦地区では伝統的建造物の保存から始まって、単に古い建物の保存だけでなく、地域連帯感の醸成、祭りの存続、水路の浄化、機音の継続、後継者、住民などさまざまな問題に人々の関心が広まってきており、今後はそれらの課題を一つひとつ解決していくことが求められています。



保存地区全景

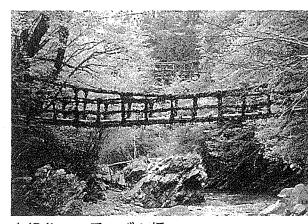
的にみても価値が高いということで、平成一七年二月二十七日に、「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されたところです。

三好市東祖谷（旧東祖谷山村）は、日本三大秘境の一つに数えられる山深い村です。日本全体が高度成長にわき、自然開発と都市化を続ける中で、交通の難所とされた本村の開發はまったく進んではいないともいえますが、そのことが、逆に他の多くの村々が失つてしまつた豊かな自然や独特の生活文化、住民たちの絆というかけがえのない財産を残す結果につながったと考えます。人々が本当の豊か

さを求めて、地方の個性が見直されるようになつた今日、未開発の自然ややすらぎを求めて東祖谷を訪れる人が増えています。さらに、平家伝説を伝える村は数多いところですが、その中でも祖谷は平家落人の里として全国的にもよく知られています。東祖谷には、安徳天皇の御火葬場がある栗枝渡八幡神社は、全國に四つ認められている安徳天皇の御陵の一つでもあります。

以上のことは東祖谷に伝わる伝説であり、史実は明らかではありません。しかし、これらの伝説は長い歴史の中で語り継がれ、村人たちによつて固く信じられてきました。それらは村人たちの誇りであり、心の支えでもあります。

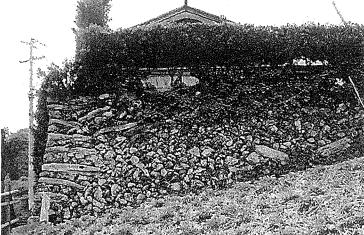
平家落人がこの地に逃れて土着したことは間違いがなく、日照時間が短く冬の訪れも早いこの東祖谷で、焼畑によりヒエ、アワ、ソバやミツマタなどを作り、自給自足の生活を行つていたのです。また、敵の追つ手から逃れるため、自生するシラクチカズラで造られたかずら橋があり、今でも奥祖谷に二重のかずら橋が残されて、秘境祖谷の観光名所となつています。



市指定史跡「安徳天皇御火葬場」



保存地区建造物群配置



保存地区屋敷地形成の石垣



国指定重要文化財「旧小采家住宅」

徳島県三好市は、平成一八年三月一日に旧三好郡の三野町・井川町・池田町・山城町、西祖谷山村、東祖谷山村の六か町村が合併して誕生したばかりです。

徳島県の西部で、四国のほぼ中央に位置し大歩危峠や黒沢湿原、紅葉の名所・竜ヶ岳、四国第二の高峰・剣山といった豊かな自然がたくさん残っています。

徳島県三好市

秘境と平家落人伝説がのこる 伝建地区

ながらも、東祖谷は三好市の南部に位置し、寒峰、塔丸、天狗塚、三嶺、剣山といった一山林が九五%、耕地はわずか〇・六%で急峻な山々に囲まれ剣山国定公園が広がり、平成七年度には「村中公園化憲章条例」、平成一六年度には「伝統的建造物群保存地区保存条例」を施行し、自然環境と景観の保全に努めているところです。

伝統的建造物群保存地区の落合地区は、険しい東祖谷山間の祖谷川と落合川との合流地点より山の急斜面上に沿つて広がる集落で、急斜面いっぱいに畑地が広がり、その中に民家がはりつくようにつくられており、集落中央にある神社周辺の鎮守の森が景観を特徴づけています。

保存地区は、東西約七五〇m、南北約八五〇m、面積約三二・三haの範囲であり、地区的標高差は三九・四mもあり、屋敷地や耕作の山腹および川沿いに集落が散在しています。山林が九五%、耕地はわずか〇・六%で急峻な山々に囲まれ剣山国定公園が広がり、平成七年度には「村中公園化憲章条例」、平成一六年度には「伝統的建造物群保存地区保存条例」を施行し、自然環境と景観の保全に努めているところです。

伝統的建造物群保存地区の落合地区は、険しい東祖谷山間の祖谷川と落合川との合流地点より山の急斜面上に沿つて広がる集落で、急斜面いっぱいに畑地が広がり、その中に民家がはりつくようにつくられており、集落中央にある神社周辺の鎮守の森が景観を特徴づけています。

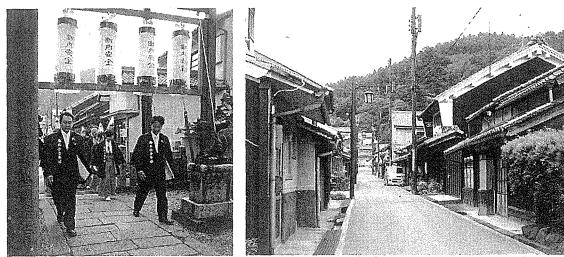
保存地区は、東西約七五〇m、南北約八五〇m、面積約三二・三haの範囲であり、地区的標高差は三九・四mもあり、屋敷地や耕作地は、石垣によってつくられ細長い形状の平坦地に設けられています。屋敷地には、主屋と納屋、隠居屋などが谷側を正面にして並んで建ち、主屋は平入りで、台所兼居間であるウチと客間であるオモテの二室を左右に並べる例やウチとオモテの間にナカノマとネマを前後に置く例など、山村民家に見られる特徴的な間取りとなっています。当初、屋根は茅葺きで間口部以外はいずれも土壁であり、その外側をひしやぎ竹（割り竹）によつて覆い、独立の仕上げとなっていました。

東祖谷山村落合伝統的建造物群保存地区は、山の中腹から麓にかけて立地する山村集落であり、江戸中期・後期に建てられた主屋等が多く残され、石垣など周辺環境とともに一体となった歴史的風致をよく伝えており、全国

東祖谷は、秘境であるがゆえに中世からの独特の風習や風俗、言葉などが残され、民俗文化財の宝庫としても知られ、祖谷川の流れに沿つて、武家屋敷「喜多家住宅」、国の重要文化財の「木村家・旧小采家住宅」、平家赤旗を所蔵する平家屋敷「阿佐家」などがあります。これらは屋敷は、この地の文化が今日まで、脈々と受け継がれてきた証として大切に保存されています。

そうした歴史と文化があつて、重要伝統的建造物群落合地区が選定されたと確信しています。地元保存会としても、自分たちの宝物を後世に残すと自主防災組織の設立や農耕、その他技術の伝承をすべく活動しており、今後の自主活動に期待するとともに、行政としての支援等課題についても十分検討していくたいと考えています。

さらに大きな伝統行事として「宇陀の初市」があり、地元では「えべつさん」と呼ばれ親しまれています。安永九年（一七八〇）の『市場一件諸書物』によると、宇陀松山は毎月三のつく日は上中・上で、八のつく日は下中・下出口で市が立ち、このほか年二回、節季市が開催されていました。この名残が、「宇陀の初市」で、毎年二月八日に商売繁盛を願う郡内の人々が吉兆を求めてえびす神社に集まり、その参道に当たる下中・下出口界隈に露店が並びます。吉兆には番号が入った「重福引券」がついており、買ったその場で最初の抽選。その日の夜に当選番号を発表して配当をしています。かつては、初市の日は仕事も学校も午前中で終わり、だれもが松山へ繰り出した時期があつたそうです。



この宇陀の初市は、えびす神社が所在する大字で運営していましたが、住民の高齢化に伴い、存続が危ぶまれた時期がありました。幸いにも地元からの要請を受けた商工会青年部が今年から初市の運営を引き継ぐことになり、伝統的な行事の中に青年部の発想を盛り込んだ事業を展開した結果、再び初市に活気が戻つてきました。

稲荷講・えびす講、いざれも商売繁盛に願いを込める行事で、商家町松山を構成する大切な要素です。松山育ちの古老は、「『せんぎよ』も『えべつさん』も、子どものころは特別樂し



みな行事だった」と語っており、「楽しかった宇陀松山の再現」のカギとして今も残る伝統行事やとだえた行事に着目し、今後のまちづくりの在り方を模索しておられます。

一方で、地域の若手を中心とした歴史的町並みを活用する取組も始まっています。

「松山夢街道まちなみライトアップ」です。夜の町並みを魅力的に演出し、地元住民や来訪者に見てもらおうと、平成一四年から毎年行われているイベントです。毎年、一五軒前後の伝統的な商店が並び、地域住民による模擬店やコンサート等でにぎわいます。

最終日には、町家に光が当たられ、

わいします。

例年は八月下旬に実施されます。

宇陀松山の重要な伝統的建造物群保存地区選定、宇陀松山城の史跡指定と、今

が現在の町の骨格になっています。

元和元年（一六一五）に城は壊されました。元和元年（一六一五）に城は壊されました。が、城下町は江戸時代中期から天領になり、宇

町並みの始まりで、近世初頭に豊臣家家臣が古城山（宇陀松山城跡）の間に南北に細長く展開しています。南北朝時代から戦国時代にかけて秋山氏が築いた城とふもの集落が町の改修と城下町の拡大整備を行ったときの町割が現在の町の骨格になっています。

元和元年（一六一五）に城は壊されました。

が、城下町は江戸時代中期から天領になり、宇

町並みの始まりで、近世初頭に豊臣家家臣が城

改修と城下町の拡大整備を行ったときの町

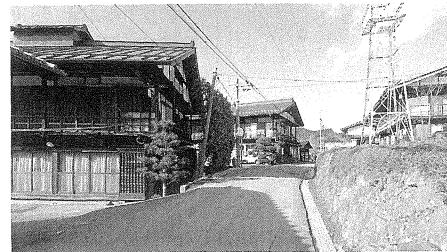
割が現在の町の骨格になっています。

が、城下町は江戸時代中期から天領になり、宇

町並みの始まりで、近世初頭に豊臣家家臣が城

改修と城下町の拡大整備を行ったときの町

割が現在の町の骨



街並み

赤岩の街並み

赤岩の歴史と文化

敷地は段丘の二段目を南北に走る道路に面して形成され、集落の背後（東側）には高間山により形成された山々が連なり、崖が切り立つた独特の山間風景をつくりだしています。赤岩地区では旧石器時代の土器片や石器などが出土しており、隣接する広池地区では、縄文時代中期後半のたて穴式住居が発掘されています。このころから人々の居住があつたと認められます。

古代から中世における赤岩の歴史は明らかではありませんが、赤岩は三原荘に属していましたことが知られています。また、現在赤岩地区に居住する湯本家、関家の歴史は古く、中世までさかのぼるとされ、両家の歴史から中世から近世にかけての赤岩の一端を知ることができます。

特に湯本家の建物は、塗り造りと称して、赤土を厚く塗り上げた防火造りのもので、広々とした地下室を備えていました。

農家の現金収入源となつたのがこんにゃく芋栽培でした。こんにゃく芋の栽培には、冬期間に芋を掘り出して保温する場所が必要であ

す。また、群馬県では珍しい妻入りで、二階

への昇降は階段ではなく、四間近い長さの傾

斜した廊下にするなど、独特の造りになつて

います。二階部分までは築後約二〇〇年が経

過しており、その後養蚕の拡大のため三階を

増築し約一〇〇年が経過しています。二階に

は、「長英の間」と呼ばれる一室があり、ここ

は弘化二年（一八四五）火災によつて獄舎を

逃れた高野長英を一時かくまつたといわれる

部屋で、往時のまま保存されています。

このほかにも、湯本家では江戸初期から明

治まで九代にわたり医業を行つており、明治

の文豪、幸田露伴も愛飲したマムシ酒の「月

桂酒」や、河童より伝授されたとする「命宝

散」などの家伝薬がありました。

赤岩地区では、明治以降、養蚕がさかんに

なるのに伴い、住宅が徐々に養蚕に適したものに建て替えられ、現在の集落景観がかたちはづべられるに至つたと考えられます。

養蚕は昭和三〇年代ごろまで赤岩地区のは

とんどの家で行われ、昭和三七年に稚蚕飼育

所（ドムロ）が造られ、飼育の難しかつた稚

蚕を、指導員のもとで共同飼育するようにな

りました。

昭和三〇年代以降徐々に、養蚕に代わって

農家の現金収入源となつたのがこんにゃく芋

栽培でした。こんにゃく芋の栽培には、冬期

間に芋を掘り出して保温する場所が必要であ

農山村の伝統と取組

六合村は群馬県北西部三国山脈の南麓に位置し、北は長野県・新潟県に接しており、村の総面積は一〇一・八km²、標高は六〇〇m

周囲の山々や湖とともに幻想的な空間をつくりだします。また、野反湖は太平洋側と日本海側の分水嶺となつており、湖水は日本海に注いでいます。

現在の六合村と草津町は明治二三年に旧草津村から分村し、入山、生須、小雨、太子、日影、赤岩の六つの大字からなる六合村は、古事記や日本書紀の中で東西南北天地の六つが合わさり国をなすことを「六合」と記述していましたことからこの名称をつけたといわれています。

大正時代以前、小雨地区には「冬住み」の制度がありました。当時、草津で旅館業を営んでいた人々は、一月になるとお客様も途絶え、豪雪で住むことのできない草津から標高一五〇〇mの高地で、毎年五月中旬ごろまでは残雪があり、初夏から初秋にかけ湖の周りには、シラネアオイやコマクサ、レンゲツツジやノゾリキスゲ、マツムシソウやヤナギランなど色鮮やかな草花が咲き乱れ、二〇〇〇m級の県境近くには、昭和三〇年に發電用として日本で初めてのロックフィルダムが建設され、湖となつた野反湖があります。野反湖は標高一五〇〇mの高地で、毎年五月中旬ごろまでは残雪があり、初夏から初秋にかけ湖の周りには、シラネアオイやコマクサ、レンゲツツジやノゾリキスゲ、マツムシソウやヤナギランなど色鮮やかな草花が咲き乱れ、二〇〇〇m級の

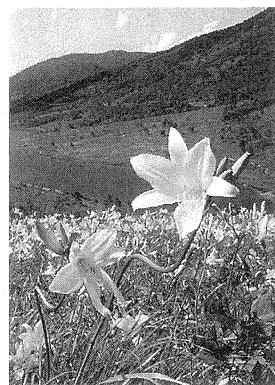
県境近くには、昭和三〇年に發電用として日本で初めてのロックフィルダムが建設され、湖となつた野反湖があります。野反湖は標高一五〇〇mの高地で、毎年五月中旬ごろまでは残雪があり、初夏から初秋にかけ湖の周りには、シラネアオイやコマクサ、レンゲツツジやノゾリキスゲ、マツムシソウやヤナギランなど色鮮やかな草花が咲き乱れ、二〇〇〇m級の

県境近くには、昭和三〇年に發電用として日本で初めてのロックフィルダムが建設され、湖となつた野反湖があります。野反湖は標高一五〇〇mの高地で、毎年五月中旬ごろまでは残雪があり、初夏から初秋にかけ湖の周りには、シラネアオイやコマクサ、レンゲツツジやノゾリキスゲ、マツムシソウやヤナギランなど色鮮やかな草花が咲き乱れ、二〇〇〇m級の

県境近くには、昭和三〇年に發電用として日本で初めてのロックフィルダムが建設され、湖となつた野反湖があります。野反湖は標高一五〇〇mの高地で、毎年五月中旬ごろまでは残雪があり、初夏から初秋にかけ湖の周りには、シラネアオイやコマクサ、レンゲツツジやノゾリキスゲ、マツムシソウやヤナギランなど色鮮やかな草花が咲き乱れ、二〇〇〇m級の



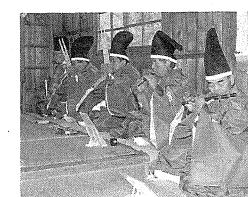
六合村全景



キスゲ

県境近くには、昭和三〇年に發電用として日本で初めてのロックフィルダムが建設され、湖となつた野反湖があります。野反湖は標高一五〇〇mの高地で、毎年五月中旬ごろまでは残雪があり、初夏から初秋にかけ湖の周りには、シラネアオイやコマクサ、レンゲツツジやノゾリキスゲ、マツムシソウやヤナギランなど色鮮やかな草花が咲き乱れ、二〇〇〇m級の

県境近くには、昭和三〇年に發電用として日本で初めてのロックフィルダムが建設され、湖となつた野反湖があります。野反湖は標高一五〇〇mの高地で、毎年五月中旬ごろまでは残雪があり、初夏から初秋にかけ湖の周りには、シラネアオイやコマクサ、レンゲツツジやノゾリキスゲ、マツムシソウやヤナギランなど色鮮やかな草花が咲き乱れ、二〇〇〇m級の



雅楽

赤岩地区では毎年春と秋の二回、赤岩神社の祭典が行われています。春の祭典では、以前より雅楽や小学生の四名の女子が巫女の装いで行う「乙女の舞」が奉納されました。しかし、雅楽は指導者が赤岩からいなくなつたことにより休止され、乙女の舞だけが続けられてきましたが、近年、子どもの減少によりこれも休止されました。そこで、二年ほど前から地元の有志により雅楽が復活され、伝建地区としての歴史的風致とともに、伝統文化の灯を守つていく機運が高まっています。

赤岩地区は伝統的建造物群保存地区としては産声あげたばかりであり、まだまだ期待に添えない部分もありますが、六合村全体の風景・自然・空気・歴史・文化・触れ合いなどなど、たくさん魅力ある村ですので、ぜひお出かけください。



町並みについてのラジオ収録

木曾平沢らしい伝統的な景観の在り方を検討しています。広報部会では、木曾平沢でのまちづくりの実践を発信したり、情報の共有を図り、防災部会では歴史的な町並みにおける防災面について検討を進めます。女性部会は推進委員会の女性部の活動を引き継いだもので、先進地視察を企画・実施したり勉強会を開催したりしており、まちづくり活動の主体を担つ皆さんの町並みに対する認識を高め、理解を深める機会を提供しています。

さらに、保存会ではホームページ(<http://www.kusoniarasawa.jp>)を開設し、順次内容の充実・整備を進めています。また、恒例の甘味をいただきながらの女性部会では、サロン的な雰

塩尻市木曾平沢地区は、長野県中部塩尻市内の南部に位置します。去る平成一八年七月五日に木曾漆器の漆工町として、重要伝統的建造物群保存地区に選定されたばかりの町並みです。その町並みは中山道に沿い、保存地区は木曾平沢の旧市街地を中心にしてJR中央西線と奈良井川に挟まれた東西約100m、南北約850m、面積は一二・五haに及ぶものです。町並みの構成は、街道に面して短冊状の敷地が奥へ広がるものですが、その通りに面した主屋については特に近代以降、漆工町として発展したこと反映して、近世から近代に至る多様な時代層や意匠が混在する複層的な構成になっています。

木曾漆器の生産場所である塗う蔵と呼ばれる木曾平沢独特の土蔵や作業場が塗え、奥行きの深い町並みになっています。木曾平沢地区は現役の漆器産地として現在でも区は木曾平沢の旧市街地を中心にしてJR中央西線と奈良井川に挟まれた東西約100m、南北約850m、面積

長野県塩尻市木曾平沢

漆工町を守る人々

ます。一方で街路からは直接見えない敷地には、現役の木曾漆器の生産場所である塗う蔵と呼ばれる木曾平沢独特の土蔵や作業場が塗え、奥行きの深い町並みになっています。木曾平沢地区は現役の漆器産地として現在でも我が国有数の地位を維持し続けています。

これまでの木曾平沢のまちづくりにおいて、これがまでの木曾平沢のまちづくりにおいて、

その活動に携わる住民の皆さんとの活動に触れないので、いきません。ことに女性の認識の高まりが、木曾平沢の特に近年のまちづくりを大きく進めたことは間違ひありません。平成一八年四月二十五日、それ以前の木曾平沢町並み保存推進委員会(以下「保存会」)を中心としたまちづくり活動では、みずから守り育てる」と、我々自身に何ができるか、という問題意識に立ち自立的な取組を地域を挙げて続けています。特に保存会発足以降は、景観、広報、防災、女性という四つの部会に組織を整え、それぞれの課題について住民自らが責任をもつて進める体制をとっています。景観部会では、



重要伝統的建造物群保存地区選定を祝う横断幕



和氣あいあいを見せる漆器祭(毎年6月上旬開催)

闇気の中で町並みについての意見交換や夢を語ったり、町並みのルールなどについて話し合つたりしています。特に平成一九年度からは、木曾平沢地区でも修理・修景事業が始まることで、先進地視察を企画・実施したり勉強会を開催したりしており、まちづくり活動の主体を担つ皆さんの町並みに対する認識を高め、理解を深める機会を提供しています。

木曾平沢の充実・



和氣あいあいとした女性部会

れれているものと同種の事業です。これにより、木曾平沢の皆さんの漆工町にかける思いが、いよいよ具体的な町並みの整備に結びついいくことになります。奈良井地区同様木曾平沢地区でも保存地区内の建物件数が比較的多いことから、ここ数年間は、ある程度まとまつた件数の事業化が予想されます。今後は、重要な伝統的建造物群保存地区塩尻市奈良井地区のまちづくり組織である奈良井宿保存委員会とも協働・連携して地域づくりをますます進めいくことにもなりましょう。

木曾平沢では、公開している公共施設はありませんが、民間の漆器店工房などでは敷地

もあります。伝統的建造物群保存地区としては、いまだ整備はされていませんが、最も新しい伝統的建造物群保存地区の町並み漆工町木曾平沢と、温かみのある木曾平沢の皆さんのホスピタリティに触れるために、また、伝統工芸である木曾漆器の真髓に触るためにもぜひ、漆工町木曾平沢へお越しください。最後に木曾平沢の歩き方として、注意点を一つ。漆器は紫外線に弱いため通常店舗は暗く、一見外からは閉まっているように見えることがあります。臆せずにどんどん中へ入って実際に手で触れてみてください。

(塩尻市櫛川支所振興課町並み保存係主任 石井健郎)

「鮎市」と称して毎年一月一九日の夜明け前から、全国でもめずらしい鮎を売る市（露店）が開催され、市内外各所からの買い物客により正月料理の風物詩としてにぎわいます。この新たなアイデアが展開されています。

歴史継承と町並みの活用

また、江戸期からの酒造業を継承する金波（屋号）は、終日、酒造りの各持ち場で多くの従業員が元気な姿を見せます。先日、部門別で日本の賞をもらい、次のステップへ若社長の新たなアイデアが生まれています。

現在、これから町並み保存に大きく貢献する空き家対策の優良事例として、空き酒蔵を改修した蕎麦屋があります。開店後一〇年以上経ちますが、この店がもつ「食」と「おしゃれ」の雰囲気を目的に県外からの客も増えています。

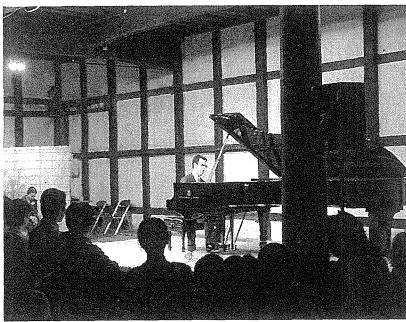
造の時間帯に漂うなんともいえない香りに、通りすがりの人たちもつい足を止めます。造りたての醤油を堪能した遠方の観光客から、直接、注文が絶えません。

また、江戸期からの酒造業を継承する金波（屋号）は、終日、酒造りの各持ち場で多くの従業員が元気な姿を見せます。先日、部門別で日本の賞をもらい、次のステップへ若社長の新たなアイデアが生まれています。

現在、これから町並み保存に大きく貢献する空き家対策の優良事例として、空き酒蔵を改修した蕎麦屋があります。開店後一〇年以上経ちますが、この店がもつ「食」と「おしゃれ」の雰囲気を目的に県外からの客も増えています。



「酒造り」の伝統を守る若い光武社長のチャレンジは続く



広さ150坪超の吳武酒造酒蔵でのコンサート

これは「フナンコグイ」と呼び江戸時代からの風習として続き、二十日正月には恵比寿、大黒さんにお供えして商売繁盛を願い、昆布や根野菜といっしょに煮込む健康的な伝統料理としても食されます。

また、地元のまちづくり団体「NPO法人水とまちなみの会」が実施する各種事業では、地元小学生を対象に育成事業も兼ねて、保存修理工事を現在行っている茅葺武家住宅で今年七月に土壁塗り体験を行いました。昨年度は呉竹酒造の大型酒蔵で、全盲の世界的ピアニストである梯剛之（かねしゆうじ）さんの小児ガン撲滅チャリティ＆肥前浜宿まちづくりコンサートを開き、合わせて約八〇〇名の観客が酒蔵内のすばらしい反響効果によるピアノ演奏の澄んだ音色に酔いしました。町並み一帯の特色を最大限に生かしたイベントとして、「一月と二月・肥前浜宿ウォーキング」「三月・肥前浜宿花と酒まつり」「五月・肥前浜宿スケッチ大会」等、継続的な取組も行っています。市の平成二三年度モデル事業で修復された「繼場（江戸時代に旅人の荷物を中継する場所）」を拠点として、まちづくり活動の広報と訪問者のサポートのために、ボランティア当番（観光ガイド、掃除、土産販売等）も行っています。

重要伝統的建造物群保存地区 選定からの新たなスタート

この地区は交通が不便な面や、歴史的建築物の傷みが目立つ点はあるものの、他の町ではあまり例をみない時代をさかのぼったかのような風情と、古くひなびた感じながらも素朴なたたずまいの町並みにより、その雰囲気に魅了された本物のリビーターも後を絶ちません。この町並みを確実に後世へ残すため、重要伝統的建造物群保存地区選定を契機としてNPO法人組織に地元の若手設計士グループも加入し、ソフト・ハード両面からの保存体制も動き始めました。

今後は町並み全体を地元共通の資産として、末代まで守られ続ける技術と意識の形成を目指していきたいと思います。

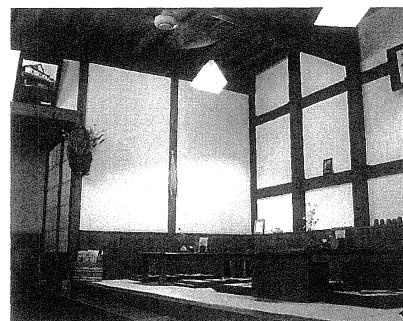
（鹿島市建設環境部まちなみ活性化課係長 岩下善季）



町並みに元気を与えるボランティアグループのがんばり



山口社長が追及する「造りたて醤油」の味は格別



蕎麦処「西の蔵」の内装表現は小柳代表のこだわり

佐賀県鹿島市

新選定 和洋建築が建ち並ぶ 佐賀鍋島鹿島藩の醸造町

威風堂々の町並み空間

〔鹿島市浜中町八木木宿地区〕は佐賀県南西部に位置し、福岡と長崎からはJR長崎本線

この地区から約1kmの場所には、年間約二八〇万人の参拝客が訪れる日本三大稻荷の祐徳稻荷神社があり、立地条件にも恵まれています。今年七月五日には、浜川を挟み港町として栄えた茅葺町家が今も多く残る地区と、二か所同時に重要伝統的建造物群保存地区選定を受けることができました。

町並みの貴重な人材（人財）

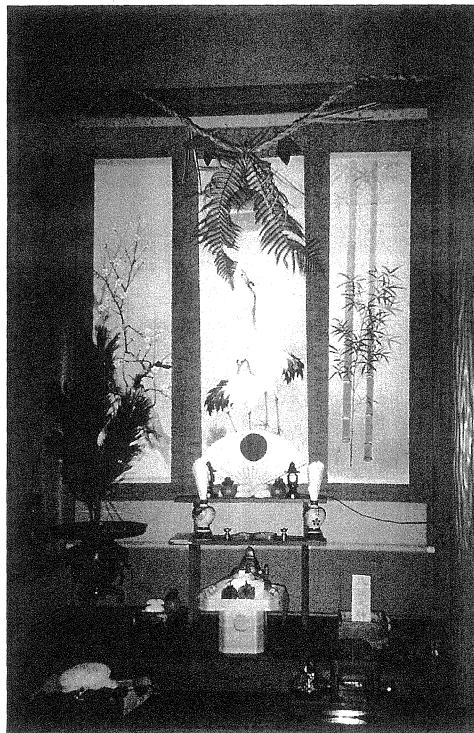
で約一時間の距離、福岡と長崎を結ぶ国道二〇七号線沿いに隣接しています。長崎街道の

多良海道のほぼ中央の通り沿いには、今までの醸造業の歴史を受け継ぐ人たちがいます。明治期から醤油製造を営む赤レンガ煙突が所同時に重要伝統的建造物群保存地区選定を受けることができました。

多良海道のほぼ中央の通り沿いには、今までの醸造業の歴史を受け継ぐ人たちがいます。明治期から醤油製造を営む赤レンガ煙突が

目印のヤマショウ（屋号）周辺では、醤油製

多良海道のほぼ中央の通り沿いには、今までの醸造業の歴史を受け継ぐ人たちがいます。明治期から醤油製造を営む赤レンガ煙突が



正月の飾り付けがされた床の間

は、しめ縄以外に大漁旗、松・竹・梅の木をひとくくりにしたものを作りました。この飾り付けは、三が日はそのままにしておきます。

一月一日は、朝四時ころに家主が起きます。正装で若水をくんでお湯を沸かしてお茶を入れ、神さん仏さんに供えます。若水は、以前は自宅の井戸から汲み上げた水を使っています。しかし、近年は水道水を使用しています。お茶を供え終わると、家主は赤みその雑煮を作ります。キリメイカは、一切れを皿に入れ雑煮やおせち料理とともに家族全員でいただきます。

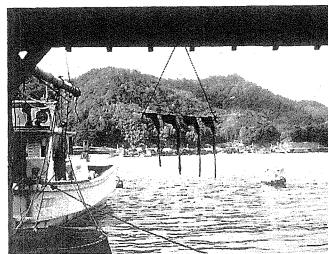
奥さんは、早起きはしません。昔から倉家では家主が「奥さん起きてください」と言って声をかけるまで起きさせません。さらに奥さんが朝の身支度をする間に、家主は家族の雑煮を作ります。正月の三が日は、代々家主が作り、奥さんは何もしないことになっています。その理由はわかりませんが、父親から聞き伝えられたとおり、今もそのように行っています。以前はどの家もこのようでしたが、今は若い家の場合は奥さんが作っている家もあります。しかし、昔ながらの伝統を守っている倉家では、家主が行っています。

昼前に船の乗り初めをします。船靈さんにと「大漁」を祈願し、船靈さん、船首、船尾にお神酒を供えます。なお、女性は三が日は船に乗ることが許されていません。

一月一日の朝、船の出初めをします。朝六時ころから沖へ出港し、昼前に帰港します。捕つてきた魚は、新婚さんや若い夫婦が二日に親元へ新年のあいさつに行くので、お土産として持たせます。

一月三日は、特に何もなくのんびりと過ごします。

今回の聞き取りでは、暮れから正月三が日の様子を調査しました。普段と違う男女の役割りや過ごし方などに驚き、また、いわれは不明であるにもかかわらずその伝えを守り取り組んでおられる倉家の様子がうかがえました。



舟屋に干されたアオリイカ

暮れから正月三が日の行事等について、聞き取り調査によって明らかになった点を紹介します。正月の準備は、一一月中旬のキリメイカ作りから始まります。

二・三日塩週間から一〇日かけて天日干しをかんに乾かします。そ

京都府北部の丹後半島に位置する伊根町伊根浦は、平成一七年七月、漁村として、また、海面を含む伝統的建造物群保存地区として、初めて重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。その伊根浦で漁業を営んでいる倉庄嗣家の

の後、以前ならワラに包んで大晦日まで舟屋に下げて保管していましたが、現在は冷凍庫で保管しています。

一二月三〇日は、朝から昼前にかけて餅つきを行います。ついた餅は、ねずみや害虫から守るために、すべて土蔵に保管します。

一二月三一日は、正月に神棚や船に飾り付けるしめ縄作りを主屋のオモテの間で行います。材料は、ワラ、ウラジロ、わかばの葉を使います。ウラジロは一般になつた茎を、わかばは葉だけを裏山から採ってきます。ウラジロは裏が白いことから、人生、色の変わらないよ

京都府与謝郡伊根町

伊根浦・倉家の正月

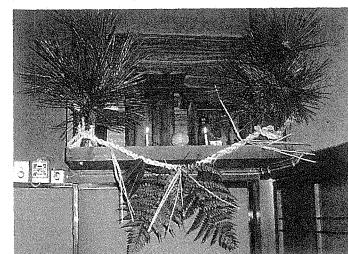
末広がりの意味があります。左撫りで編んでいくことは手前に引き込むことになり、「なんでも懐に入れるため」の意味をもっています。このように長さ約一五〇cm、直径三cmのしめ縄を作ります。

女性は、これらの作業中はオモテの間へ入ることが許されていません。理由はわかりませんが、代々そのように倉家では伝えられています。

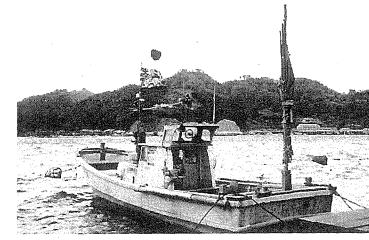
三方に盛るお供え物として串柿がありま

す。一串に一〇個の柿が並びます。両側に二個ずつ（夫婦の意味）、中に六個（仲むつまじくの意味）と並びます。すべて飾り終えるとお灯明をつけて、「これで終わります。神棚には餅を一個ずつ供え、しめ縄を張ります。松の木を神棚の両側に一本ずつ挿し、松から松へしめ縄を張ります。すべて飾り終るとお灯明をつけて、「これで終わりました。正月を迎えてください」と唱え、準備が整います。大晦日まで保管されています。

たキリメイカは鯛といふしょにお膳に載せてオモテの間に置いておきます。船の飾り付け



しめ縄が張られた神棚



お膳に載せた鏡餅と串柿二と、八合の米を入れその間に八坂神社のお札さんを拂った一升瓶を船上に置きました。

津軽の長く厳しい冬。しどみが雪の吹き込みを防いでくれる「こみせ」の中を、雪のついた分厚い毛糸の帽子とモコモコに巻かれたアノラック姿のおばさん一人が、なにやら楽しそうな話をしながらゆっくりと歩いていきます。

吹雪の日でも、こみせの中はなぜか暖かいのをしながら歩いていきます。

黒石には昔から「こみせは自分のものであつて、自分のものではない」という考え方があり、こみせの所有者にとつても利用する人々

作られるこみせの空間、それが連続することによってできる「こみせ通り」と呼ばれる通路空間。中町の景観を特徴づける「こみせ」は、家の入り口と道路との間にあらわす「曖昧」で不思議な空間です。

こみせ本体は現在、個人所有の建築物の一部であり、本来は私的な内部空間であるはずです。にもかかわらず、「こみせ通り」として連続することにより、不特定多数の人々に利用される通路として中間領域的な性質をもつことになりました。

私有地でありますから誰でも躊躇なく踏み込むことができるこの不思議な空間は、実際にさまざまな機能をもっています。夏の日ざしや雨を遮り、冬は雪を避けて通行できるかけがえのない歩行通路。また、ここにとどまる人々にとっては、知人とのあいさつや情報交換の場です。子どもたちの遊び場にもなりました。

さらに、商業発展上の効果もあります。気兼ねなくこみせに足を踏み入れた人々は、そのまま店舗の中に入り込んでいます。さらに、そのまま店の奥に進んで買物を始めます。さらに、そのまま店の奥に進んで買物を始めます。

青森県の各地で行われるねぶた祭り。通行台数最多を誇る黒石では七月三〇日から八月五日までの七日間、「ヤーレヤーレヤー」の掛け声とともに大小さまざまなかまねぶたが市内を練り歩きます。天明六年（一七八六）には「七

ねふた、そして黒石よされ

長い年月、連綿と受け継がれてきた思いのうちに保存されてきた「こみせ通り」は、訪れる人々をどこか懐かしいような気持ちにさせてくれます。「こみせ」の中を歩きながら、静かで穏やかな時間の流れを感じることができます。ただし、夏のひとときだけはまったく違う表情を見せてくれます。

にとつても、私有地を通路として提供するのにはごくあたりまえのことになっていました。個人の土地を提供して公共の通路を確保しているという形態が長い間続いてきました。これは、非常に珍しく、また誇れるものであるといえます。

こみせ通りの歴史

「黒石津軽家」が誕生したのは、今から三五〇年ほど前、江戸時代前期のことです。弘前藩三代藩主津軽信義の急死により、わずか一歳で藩主になった信政の後見役に命じられたのが、信義の弟津軽信英でした。明暦二年（一六五六）、信英が弘前藩から五〇〇〇石を分知され、黒石初代領主となりました。

信英は陣屋を造るとともに、分知以前からある古い町並みに侍町、職人町、商人町を加えて、新しい町割りを行いました。これが現在の町並みの基本になっています。また、信英は商人町に「こみせ」を作ることを奨励したとい

ます。道路側に一間おきに並ぶ木の柱の上に、ひさし状の屋根が載った格好の通路空間が、通る人々を優しく守ってくれるのであります。

江戸時代から長い時間の中で、変わることなく保存されてきた「こみせ通り」。その価値が、今見直されています。

江戸時代から、中町の通りは浜街道とも呼ばれ多くの人々が集まり、商店や旅籠が建ち並んでいました。その中町の繁榮に大きな役割を果たしてきたのが、「こみせ」の存在です。

こみせの空間と人々の思い

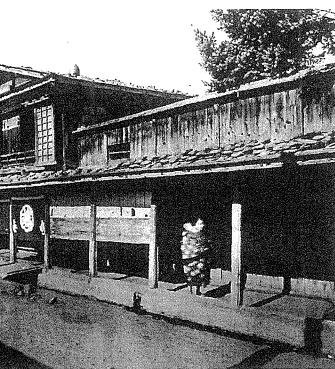
夕祭」としてさかんに行われていたという記録が残っており、また、明治二年（一八七八）イザベラ・バードがねぶた見物を楽しんだことを『日本奥地紀行』に記しています。

そして、日本三大流し踊りの一つに挙げら

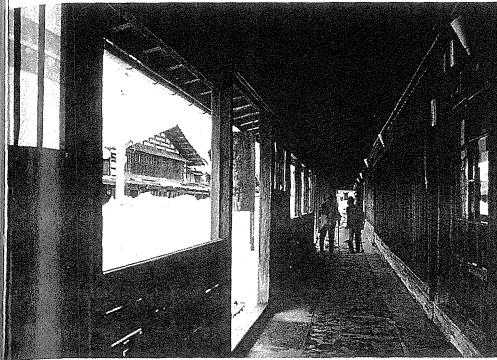
れる「黒石よされ」。起源は、五〇〇～六〇〇

年前の男女の恋の掛け合い唄であるといわれています。

一糸乱れぬ華麗な踊りで詰めかけた沿道の觀衆を魅了し、流し踊りの合間に行われる廻り踊りでは観客が踊りの輪に飛び入りします。津軽の短い夏を惜しむかのよう夜遅くまで町中が熱氣に包まれます。

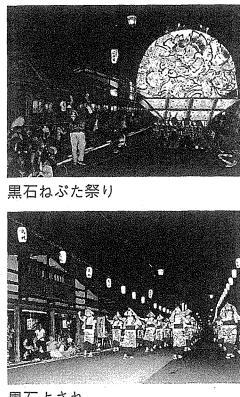


昭和初期の「こみせ通り」：緑草会編『民家図集』(大塚巧芸社、1930～31)に掲載された「こみせ」のある吳服店



冬の「こみせ通り」：柱の間に落とし込んだ「しどみ」が吹き込む雪を防ぐ

青森県黒石市 「こみせ」が連なる



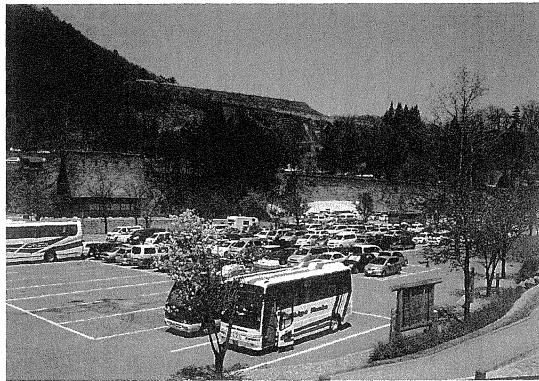
黒石ねぶた祭り



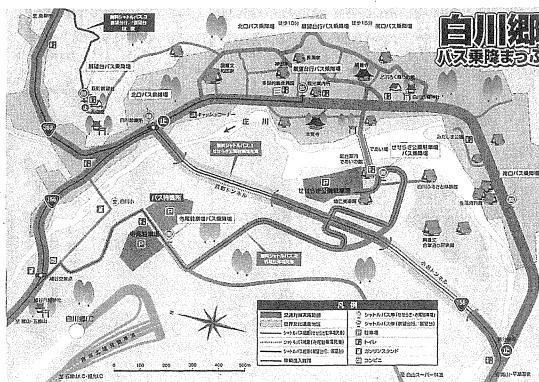
黒石よされ

今黒石では、さまざまな活動が行われています。秋と冬に開催される「こみせまつり」は、回を重ねることに訪問客が増えていきます。「こみせ保存会」には市外や県外の方も多数参加して、こみせ通りの未来を語り合っています。先祖から受け継がれてきた貴重な歴史的資産であるこみせ通りを次代に残していくために、皆で知恵を出し合って着実に保存・復原を進めいくことを目指しています。

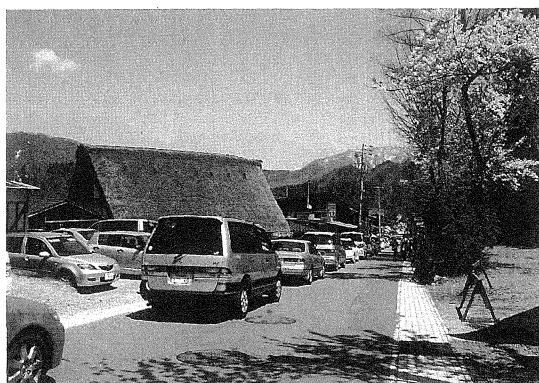
ぜひ一度、こみせ通りに来ていただいて、こみせの空間を体感してみてください。



村営の駐車場



荻町交通制限図



荻町に入ろうと車が行列

が実り昭和五一年の重要な伝統的建造物群保存地区選定につながりました。さらに次の問題として、荻町地区は伝統的建造物群保存地区制度としては特殊な農村であり、当地区全体を面として捉え、混在する一般家庭や農地、農道、水路に至るまでを考慮した保護施策をもつ必要がありました。この問題に対して、持続的な財源確保を目的として保存基金の運用利息の活用を図り独自の事業を進めることとし、さらに、村営駐車場を整備し駐車料金の一部を保存協力金として徴収させていただく

ことで修景事業並びに観光プランや環境物件調査事業など充実した事業を進める施策を整えました。平成九年には、これらの事業を専門的に進めるために保存財團を設立し、これまでの保存の主体であった住民と行政の二者に保存財團を加え、三者が協働して行う新たな体系を創設し保存事業を進めています。

現在、特に取り組んでいる問題は、地区内への観光車両の進入量の増加があります。平成七年に当地区が世界遺産登録を受けて以降、急激に増加した観光車両によって景観の悪化



うっすらと雪に覆われる荻町



切妻合掌造り家屋

岐阜県大野郡白川村

保存と活用を考える人々

岐阜県大野郡白川村は、県北西部の石川県・富山県との県境に位置し、白山連峰の険しい

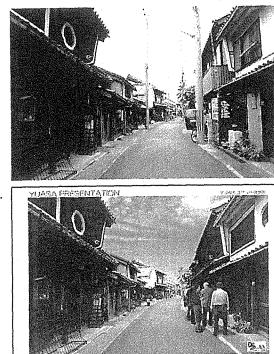
山岳地帯と有数の豪雪地帯といった気候が重なり、長く他の地域との交流が限られたこと

から秘境の地として広く知られていました。山間地であるため稻作は少なく、燃畑農業に炭焼きや薪や漆採取などが行われ、江戸時代に入ると硝の生産や養蚕に主産業を求め、住居と産業を兼ねた合理的かつ独特的な大型民家として切妻合掌造り（以下「合掌造り」）家屋を生み発達させきました。妻面を南北に並行に向けた家々が周辺の水田と山々に包まれて四季折々の美しい農村景観を作り出します。しかし、高度経済成長期を迎えると養蚕業の衰退に加え、ダム開発などにより合掌造りの多くがその姿を消していく時代を迎えます。このような中、荻町では白川村らしさが色濃く残されていましたから昭和四六年に地区住民意による自治活動として保存会を設立し、本格的な保存活動が動き始めるに至りました。

保存運動を進めるうえで、当初の問題として、保護制度のない時代にあって合掌造りを維持することは、所有者にとって日常生活の面や経済的な面など多大な負担を強いることとなりました。そこで、合掌造り民家を活用した民宿経営など観光をうまく利用することによって経済的負担の緩和を図ると同時に、文化財としての価値づけを求めて陳情活動に奮闘した結果、これらの努力に至りました。

並びに住民生活への不安や散策される方々への危険性につながる状況にあることから、パーク＆ライドシステムの運行を進めるなど、地区内で安心して観光ができるまちづくりに取り組んでいます。具体的には、本年は毎月第三金曜および土曜に観光車両の進入制限を実施いたしますので、遠くからお出かけくださった方々には多少のご不便をおかけいたしますが、そのぶん白川村の良さを歩いて満喫してください。

（白川村教育委員会文化財係長 近藤久善）



現在の町並み(上)とフォトモンタージュによる整備後のイメージ

醸造文化の歴史が薫る 紀州湯浅の町並み

和歌山県有田郡湯浅町

熊野古道と港の醤油醸造町

和歌山県の中部西岸に位置する湯浅町は、周囲を海と山が取り囲む自然環境に恵まれた小都市です。古くから熊野参詣の宿所の役割を果たすなど、陸運・海運の重要な拠点であり、漁業や商工業で栄えてきました。とりわけ湯浅を特徴づけたのは、鎌倉時代に伝わった金山寺味噌の製造過程から生まれたといわれる醤油の醸造です。室町時代の末期には商品として出荷され始め、江戸時代になると紀州藩の保護もあってさかんに製造されるようになり、文化年間の醤油業者は九二戸に及んだといわれています。

保存地区は一六世紀末ごろ、熊野街道西方の海辺に開かれました。近世から近代にかけて醤油醸造業が最もさかんであった一帯について、まちが開発されて以来の『通り』や『小路』で構成された特徴的な地割と、醸造業関連の町家や土蔵を代表とする伝統的な建造物がよく残されている地区です。

そんな住民の意識が変化し始めたのは、来訪者との交流がきっかけでした。町並みが新聞やテレビなどのメディアに取り上げられるようになり、まちを訪れる人が増えました。あいさつがてらに「どちらからおいでなさったんですね」と尋ねると「〇〇です。今日は町並み散策に来ました」という返事が返ってきます。遠い所からわざわざまちを見に来るなんて思っていると、「こはとてもいいまちですね」「懐かしい感じがしていやされます」「お醤油の良い香りがしますね」と続きます。こうした出会いが度重なり、徐々に自分たちのまちの良さに気づき始めました。

こうなると、今度はもっとまちを良くするため自分たちでできることを考え、取り組むよ

がよく残されている地区です。切妻造平入、大壁漆喰塗に本瓦葺を伝統とする町並みには、伝統法を守る老舗醸造家から醤油の芳香が漂っています。

歴史を生かしたまちづくりの提言

湯浅の町並み保存の取組は、町のまちづくり諮問機関として平成九年に設立された『まちづくり委員会』の中で「湯浅の伝統ある歴史や町並みを貴重な財産として見直そう!』という声が上がったことに端を発します。まちづくり委員会は、公募委員など町民の代表者による委員三五名と専門委員若干名を中心にして組織され、三〇〇名にのぼる協力推進委員のサポート体制で運営されました。二年間で全体会一七回、各部会を合わせると総計一四〇回以上。会議を経て平成一年に出された答申には、伝統的建造物群保存地区制度による町並み保存が重要施策として位置づけられました。そして糸余曲折ありながらも、住民と行

うになつきました。消火器の設置箱を町並みに調和したものに取り替え、エアコンの室外機などは目隠しして修景しました。各家の軒先につるした手作りの行灯は、陽が落ちてほのかな灯りがともると、ほんのりとした情調を醸し出します。また、町家の格子などに蒸籠を使つて詩歌や古民具などを展示する「せいろミュージアム」など、まちを訪れた人に楽しんでもらうもてなしも工夫され、最近では、語り部による町並みの案内も始まっています。また、町外からもまちづくりへの協力を惜しまない方々の応援がありました。パソコンを使って写真を絵画のように仕上げるデジタルスケッチや、写真を加工し、町並みから電柱などを消し去り修景するフォトモンタージュという手法でまちづくりの提案をいたしました。これら提供していただいた作品は、町並みの魅力と保存整備のイメージがひと目でわかり、住民の皆さんにもたいへん好評でした。

選定までの道のりは、最初から順調に進んだわけではありませんでした。歴史的な町並みは、そこで生まれ、生活を送ってきた人々にとっては珍しいものでもなんでもありません。伝統的な町家や醤油蔵は日常の景色に

自分たちでできること



祭礼の時期には町並みに提灯が飾られる



秋祭りには各自治会から神輿が出されます

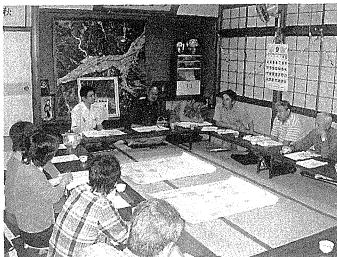
秋祭りには各自治会から神輿が出されます。保存地区からは時代衣装に身を包んだ行列も参加するようになり、伝統行事に彩りを添えています。ほかにも、かつての醤油積出港である大仙堀の清掃活動や、全町に先駆けて自主防災組織を設立するなど、環境や防災に関する意識も飛躍的に高まりました。

新たな歴史を刻むスター

町並み保存を通じて、良質な景観の形成や歴史・伝統を守り継ぐことの重要性が再認識され、コミュニケーションの結束力が強まつてしまつた。そして、以前はかかわることが少なかつた各自治会間での交流も活発になってきました。こうして、古い町並みの保存から新しい町並みづくりが始まりました。みんなでまちの将来を考え、次代へとつないでいく息の長い取組がこれからも続いていきます。重要な伝統的建造物群保存地区の選定はゴールではなく、まちの伝統を守りながら新たな歴史を刻むスタートです。

对外的な交流やまちづくりだけでなく、保存地区内にある四つの自治会では住民どうしの交流も進められてきました。保存地区の北西端には、周辺が埋め立てられるまでは海に面していた恵比須神社があります。七月二三日の『えべつさん』は漁師による神事だけとなっていましたが、約二〇年振りにお祭りとして復活させ、昨年で四回目を迎えるました。また、湯浅の氏神である顯国神社の一〇月一八日の

(湯浅町教育委員会伝建推進課係長 前田和昭)



マスタープラン会合の様子



自立の芽、レストハウスに進化する
旧逸見勘兵衛家

まちづくりの大きな不安要素ともなつていま
す。

選定以前の平成六年には、住民の手による
「熊川まちづくりマスター・プラン」が策定され、
これが今日まで、まちづくりの指針となつてき
ました。しかし私たちを取り巻く環境の変化
とともに、新たに発生した課題への対応をどう
するのか。また、美しい歴史的な町並みを守
りつつ、熊川のまちづくりをどのように持続
発展させていくのか、という大きな課題が現
前してきました。そこで、早急に「第二次能
川まちづくりマスター・プラン」を策定すること
が必要になつてきたのです。

そして、この私は、重要な伝統的建造物群保
存地区選定を受けるまでの多くの方々の苦労と
も知らず熊川へ帰つてきましたわけですが、なんと

定委員長を拝命することとなつたのです。最初はその重責に躊躇ましたが、河合会長の若い人材育成への思いを知り、だれかがやらなければいけないことだと思い返して、若輩者ですが謹んでお引き受けすることにいたしました。

「第一次熊川まちづくりマスター・プラン」は、住民自らが熊川の自立の方策を明らかにするとともに、熊川のもつ資源のさらなる活用を進め、持続可能な発展を図ることを目指し策定することいたしました。

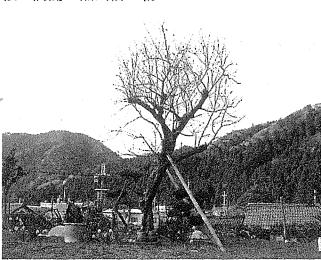
策定委員は、熊川まちづくり特別委員会を中心とし、組織された一五名のメンバーで構成し、夜遅くまで議論を重ねていただきました。その中で委員から「熊川宿はこれからどのような歩みをしていくのか。観光地化を進めていかないのか」との意見が出ました。これに対し河合

確認され、策定委員のメンバーもその考えに賛同いたしました。そして、それと並行して、熊川宿のまちづくりを持続的に発展させていくには、熊川の自立が不可欠であり、熊川宿を訪れる人々へのおもてなしの心を忘れてはならないという新たな結論を得ることになったのです。

マスター・プランの検討を始めるに当たっては、住民から幅広い意見を聞くことと、プラン参画意識を共有していくことなどを目的として、区民の二五歳以上全員を対象にアンケート調査も実施しました。そしてプランニングも終盤にさしかかるうとするころ、熊川宿においての自立を目指す動きが出てきました。熊川を訪れる人に対して何かおもてなしをしていこうということで、「熊川宿おもてなしの会」



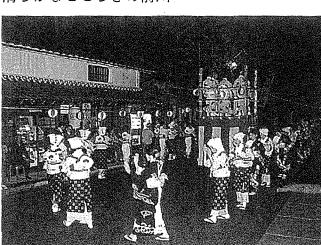
様が溝闘の熊川宿の直臣



上ノ山の柿の木



清らかな妹妹らぎの前川



— 1 —

「ここは若狭鰐街道熊川宿、私が生まれ、一
八歳まで育つた町です。滋賀県境に位置する
福井県三方上中郡若狭町熊川で、人口三〇〇〇
人余りの山に囲まれたのどかなところです。
春になると山々には緑があふれ、心地よい前
川のせせらぎの中、夏になるとセミの合唱。秋
には、上ノ山（我が家のある丘高い
山）には柿がいっぱいなりました。この柿の木

こし、今では竹でつんぱりをしています。杖でもついているような老木となっていますが上ノ山から我が家を見守ってくれているように思えます。冬には一㍍を超える雪が積もり、雪かきの毎日です。そんな幼少期から成人し大坂へ出て、私も家庭をもつこととなりました。

そして、なにげなしに過ごしてきたある里が、重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けると父から聞いたとき、驚きとともにうれし

作りの木製ポストの設置や、八〇年間にわたり途絶えていた「てつせん踊り」の復活による伝統芸能の継承活動なども活発に行われてきました。また、平成一五年には、「町並み保存への共通認識をもつことを目的として「若狭熊川宿まちづくり憲章」[若狭熊川宿の自立したまちづくりを進めていくための申し合せ事項】も策定されました。

さて、熊川宿も重要な伝統的建造物群保存地区の選定を受け

生まれ育つた熊川への帰郷
選定一〇年、そしてこれから……

福井県三方上中郡若狭町

生まれ育つた熊川へ 選定一〇年、そしてこれから……

さがこみ上げたことが今も記憶に残っています。この平成八年は、当時小学校五年生と二年生の子どもを連れて、一八年ぶりに熊川に帰ってきた年でもありました。

それから一〇年余りの間に、民家の修理や

今年も大型連休にたくさんの観光客が集落に訪れました。しかし、住民にはふだんと変わらない生活があります。観光客が通るそばの煙では耕運機による畝作りが行われています。別の煙では夫婦がジャガイモの種芋を植えています。お年寄りが道端の草取りに精を出しています。

の景観にも価値が認められています。集落の山側の上部には雪持林といつてブナ、トチ、ミズナラなどの大木が生い茂っています。この雪持林は雪崩から集落を守っています。そのほか水田用の水路も含めて、集落景観を成す重要な要素として、茅葺きの合掌造りを中心据えながら、山深い地における農村の原風景を伝え、全国でも珍しい景観を守っています。

景観の保全の努力

国の史跡に指定されてから、世の中が大きく発展し生活が豊かになる中、集落住民は生活優先か保存優先か議論を続けながらも、保存を第一として努力を重ねてきました。住民のいちばんの願いは、自宅のすぐ横に車庫を建てる事でした。しかし国の史跡を受けたからには車庫を建てるなど現状変更は望ましいものではありません。最終的には住民納得のうえでの理解が必要でした。以来、新しく建物を建てる事なく、しかも取り壊すことなく、集落の景観を守つてきています。

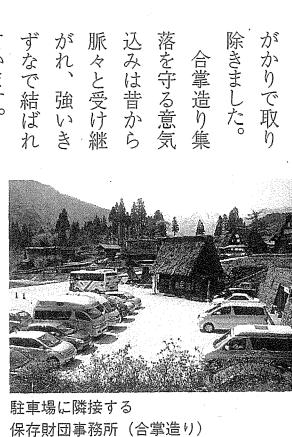
そのほかに、住民は民家の周りの田畠が荒れることがないようにしながら、花畠では季節の花が咲くように心がけ、常に家の周りの環境美化に努めています。観光客からは「花がきれいに咲いていますね」「みが落ちていなくて、家の周りはきちんと片付いています



春祭りの獅子舞に集落の結束を確かめ合う

あります。この獅子舞は観光客に見せるためのものではなく、先祖から受け継いだ祭礼として守り続けています。

また総普請といって、四月には雪解け後の集落美化と春祭りに向けての準備、五月には集落の道路清掃、七月には道路や神社の周りの草刈りをして守り続けています。



駐車場に隣接する
保存財団事務所（合掌造り）

保存に向けて保存財団設立

集落内の人口が減少し、高齢化が進む中で合掌造り集落を維持・保存することを目的として、平成一〇年に「世界遺産相倉合掌造り集落保存財団」が設立されました。収入源としては観光客の駐車料金を「保存協力金」としていただいている。そのほかに民俗館の入場料やキャンプ場使用料などもあります。

保存協力金は、合掌造りの屋根葺き用の茅を確保するために茅の育成と茅刈り作業の人为費などに使われています。そのほかの財団の仕事には集落内の環境美化や積雪期の除雪作業があります。保存財団が設立されだから住民の負担が軽減され、財団の機能がうまく果たされています。今後はさらに茅場の保存と茅の確保に努めてほしいと願っています。

（相倉史跡保存顕彰会長 図書健裕）

富山県南砺市

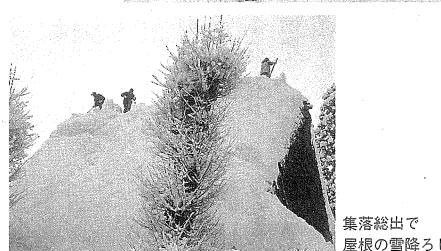
合掌造り集落を守る住民



相倉合掌造り集落全景



真冬も観光客で
にぎわう



集落総出で屋根の雪降ろし

集落景観の保存のリスト

当地的の保存地区は屋敷地と耕作地が中心となっています。屋敷地は周囲に石垣や生け垣を設けることなく、合掌造りや瓦屋根の民家の周りには田や畑の耕作地が広がっています。集落の背後には石垣で築いた段々畑があり、そ

れ、周囲を山林で囲まれた



観光客が通るそばで行われる農作業

南西部に位置
し岐阜県境に

近く、日本有

数の豪雪地

帯、五箇山に

あります。集

落は庄川の川

面より高く離

大田市は島根県のほぼ中央に位置し、人口は約四万人で日本海に面しており、国立公園三瓶山に代表される豊かな自然に囲まれています。

平成一七年一〇月には、旧大田市と旧仁摩町、旧温泉津町が合併し新大田市が誕生しました。今年七月、世界遺産に登録された石見銀山遺跡は、新大田市にあります。

昭和六二年に国の選定を受けた大田市大森屋が細長く連なる人口約四〇〇人の小さな町で、かつては銀山でございました。保存地区の名称は、陣屋町である「大森町」と鉱山にかかる「銀山町」の二つの町で構成されています。今年七月、世界遺産に登録された石見銀山遺跡は、新大田市にあります。

昭和六二年に国が選定を受けた大田市大森町文化財保存会が設立されました。保存会は設立当時から全戸加入とし、文化財の清掃、遺跡の学習活動や情報発信、伝統的建造物群保存地区決定の際には活発な議論の場となるなど、さまざまな活動を経て今に続いています。今年は保存地区の選定一〇周年、文化財保存会の設立五〇周年の節目の年に当たります。

住民と行政の協働

観光客の増加に伴う住民生活の変化について、特に交通問題や定住を前提とした空き家の活用策、観光客へのマナーの喚起などの課題が指摘されています。これらは住民生活に密接に関連するため、月一回開催される自治会協議会の場で、行政も加わって「遺跡と自然と人々の暮らし」が調和する町の良さを引き継ぐことを念頭に課題解決に取り組んでいます。

受け継がれる行事

大森町には、代官を祀る井戸神社や鉱山の神（金山彦命）を祀る佐比壳山神社など、今でも地元の人たちによって受け継がれている神社がありますが、その行事の中から町の氏神である城上神社の例大祭を紹介します。

神社の由来については定かではありませんが、他所に鎮座されていたものを、永享六年（一四二四）大内氏により大森町の愛宕山に遷祀され、天正五年（一五七七）毛利氏により現社地に再度遷祀され、篤い信仰を集めました。また「大森」という地名は、この境内周

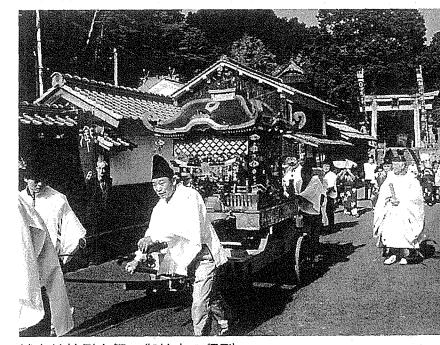
が続いている。かつては遺跡の文化財指定を住民自らが行うなど、文化財保護に関する意識が高く、昭和三三年には大森町文化財保存会が設立されました。保存会は設立当時から全戸加入とし、文化財の清掃、遺跡の学習活動や情報発信、伝統的建造物群保存地区決定の際には活発な議論の場となるなど、さまざまな活動を経て今に続いています。



文化財の一斎清掃



自治会協議会による町民説明会



城上神社例大祭の御神幸の行列

大田市は島根県のほぼ中央に位置し、人口は約四万人で日本海に面しており、国立公園三瓶山に代表される豊かな自然に囲まれています。

平成一七年一〇月には、旧大田市と旧仁摩町、旧温泉津町が合併し新大田市が誕生しました。今年七月、世界遺産に登録された石見銀山遺跡は、新大田市にあります。

昭和六二年に国が選定を受けた大田市大森屋が細長く連なる人口約四〇〇人の小さな町で、かつては銀山でございました。保存地区の名称は、陣屋町である「大森町」と鉱山にかかる「銀山町」の二つの町で構成されています。今年七月、世界遺産に登録された石見銀山遺跡は、新大田市にあります。

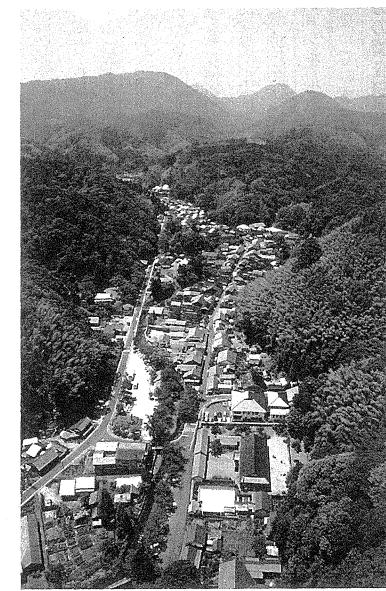
昭和六二年に国が選定を受けた大田市大森町文化財保存会が設立されました。保存会は設立当時から全戸加入とし、文化財の清掃、遺跡の学習活動や情報発信、伝統的建造物群保存地区決定の際には活発な議論の場となるなど、さまざまな活動を経て今に続いています。

昭和六二年に国が選定を受けた大田市大森町文化財保存会が設立されました。保存会は設立当時から全戸加入とし、文化財の清掃、遺跡の学習活動や情報発信、伝統的建造物群保存地区決定の際には活発な議論の場となるなど、さまざまな活動を経て今に続いています。

大森町文化財保存会の設立

大森町には町並みのほか、鉱山や信仰、山城など四〇〇年間にわたる遺跡が多数残されていて、文化財を身近に感じながらの暮らしをめざす活動が行われています。大森町は、以降も地方行政・経済の中心としての機能を果たしましたが、昭和二〇年代以降、各施設は順次大田町などへ移されていました。

反面、銀の産出量は減少し続け、明治維新以降は銅を中心とする完全な民間経営となりますが、大正一二年（一九二三）に休山となり四〇〇年の歴史を閉じることになりました。



大森銀山の町並み

島根県大田市 町並み 文化財とともに暮らす

石見銀山と町並みの成立

石見銀山は、大永六年（一五六二）博多の商人により本格的に開発されました。その後、新しい精錬方法の導入や、江戸幕府初代奉行大久保石見守の手腕による産銀量の増加などもない戦国期～江戸時代初期にかけて大きく繁栄しました。

今に伝わる「大森町」の町並みは、江戸時代に入り石見銀山御料（幕府直轄領）の行政の拠点とするため意識的に整備されたもので、行政・経済の中心としてにぎわいました。

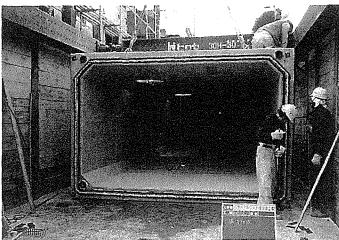
反面、銀の産出量は減少し続け、明治維新以降は銅を中心とする完全な民間経営となりますが、大正一二年（一九二三）に休山となり四〇〇年の歴史を閉じることになりました。大森町は、以降も地方行政・経済の中心としての機能を果たしましたが、昭和二〇年代以降、各施設は順次大田町などへ移されていました。

反面、銀の産出量は減少し続け、明治維新以降は銅を中心とする完全な民間経営となりますが、大正一二年（一九二三）に休山となり四〇〇年の歴史を閉じることになりました。大森町は、以降も地方行政・経済の中心としての機能を果たしましたが、昭和二〇年代以降、各施設は順次大田町などへ移されていました。

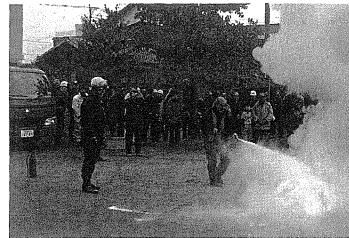
反面、銀の産出量は減少し続け、明治維新以降は銅を中心とする完全な民間経営となりますが、大正一二年（一九二三）に休山となり四〇〇年の歴史を閉じることになりました。大森町は、以降も地方行政・経済の中心としての機能を果たしましたが、昭和二〇年代以降、各施設は順次大田町などへ移されていました。



若宮おくんちの毛槍行列



火災に備え、100tの防火水槽を設置



町ぐるみで消火器訓練



平成18年度に竣工した防災施設附属棟

災害計画を策定しました。

調査期間中の平成一

五年一二月に、伝建地区内で火災が発生し住宅が一棟全焼しました。この火災で水利や初期消火、組織の問題など多くの課題が浮き彫りとなり、住民から早急に防災事業の実施を求める声が出されました。それを受け、平成

一六年度より防災事業に着手し、昨年末で

初期消火用（住民用）と本格消火用（消防署用）のための一〇〇tの防火水槽とそれに伴う附属棟（ポンプ室・便所・避難室）など、防災施設四か所の整備が完了したところです。

今後、防災計画に基づき整備を行っていきますが、消防署の消火活動と伝建の許可基準との整合性をどう高めるか等の課題を克服しながら進めていきます。

保存地区を守る住民

保存地区内の高齢化や空き家などの課題を抱えながら、消防活動を住民の手で行うため、地元の保存会「吉井の町並をよくする会」では文化財防火デーに毎年、初期消火の訓練を行なっています。町並みを火災から守る活動も行っています。防災設備が整備されるまでは消火器による消火訓練でしたが、現在では関係機関と連携した訓練を実施しています。

今後は自主防災組織としての体制づくりを推進し、住民の自体意識をさらに育成していくと考えています。

伝建的建造物群保存地区を住み続けながら文化財として守っていくことは、地域住民の方とともに行政として早急の対策を講じていいことが肝要であると思います。今後とも、さらに災害に対して強い町づくりを行っていきたいと考えています。

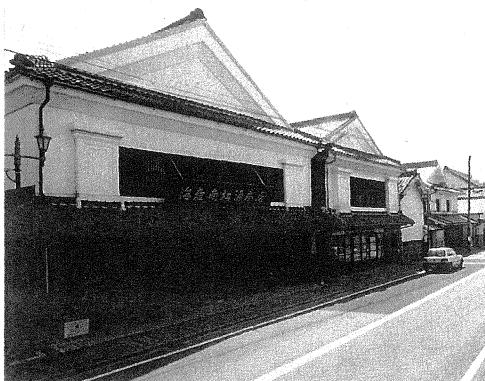
（うきは市教育委員会生涯学習課文化財保護係長 小河誠嗣）

防災に強い町づくりを目指して

白壁土蔵の町並みのおこり

うきは市筑後吉井伝統的建造物群保存地区は、福岡県の南東部の筑後川中流域に位置し

ています。慶長七年（一六〇二）に町建てが行われ、江戸時代を通じて城下町久留米と天領日田を結ぶ豊後街道の宿駅として機能しました。江戸時代中期以降には商品作物の栽培・加工およびその集散や「吉井銀」と称された有力商人の金融活動で繁栄しました。



耐火性に優れた白壁土蔵が並ぶ筑後吉井の町並み



防災施設を利用して消火訓練

保存地区は、筑後街道（現国道二二〇号）沿いの重厚な塗屋造町家が連続する町並みと災除木川沿いに広がる屋敷群から構成されています。明治二年（一八六九）五月の大火を契機に、草葺きから瓦葺き塗屋造の町家に変貌し、経済の最盛期であった大正時代に現在見るような町並みとなりました。まさに、耐火性の優れた白壁土蔵の町並みは、火災から生命や財産を守るために知恵であり、先人のすばらしい遺産といえるでしょう。

歴史的町並みの保存活用

このように、先人たちの生活と財産を守つた伝統的な町並みを保存し、地域の活性化に

つなげていくとする地元住民の努力により、

平成八年一二月に福岡県で初めて国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けました。

うきは市では伝建地区の保存整備に、文化庁の伝建修理事業だけではなく国土交通省の街並み環境整備事業も実施してきました。今後もさまざまな手法を用いて歴史的町並みの保存に取り組んでまいりたいと考えております。また、町並みを生かしたさまざまな町おこし的イベントや「若宮おくんち（一〇月一七・一八日）等の伝統的な祭りによって伝建地区のにぎわいが住民の手によって演出されています。

防災事業の動き

平成一四年度より二か年で調査を行い、防

終わりに

近年、全国的に地震・台風によつて、伝統的な家屋が倒壊する等、多くの被害が出ています。うきは市でも平成一七年三月二〇日に発生した福岡県西方沖地震により壠や壁の被害がありました。また、毎年、台風によつて屋根瓦が飛ぶ等の被害が出ています。

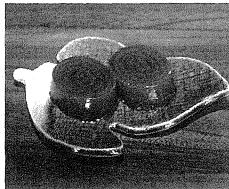
先日は、新潟県中越沖地震のニュースが飛び込んできました。倒壊した家屋によつて多くの高齢者が犠牲となり、あらためて地震等の自然災害に対する対策をしなくてはいけないと考えていました。

その予防対策として景観整備はもとよりですが、災害時のライフラインの強化として伝建地区内の国道二二〇号の電線の地中化事業が本年度より着工しました。また、家屋については耐震補強だけではなく、蟻害の予防事業を地区ごとに実施していきたいと考えています。

伝建的建造物群保存地区を住み続けながら文化財として守つていくことは、地域住民の方とともに行政として早急の対策を講じていいことが肝要であると思います。今後とも、さらに災害に対して強い町づくりを行っていきたいと考えています。



勘兵衛茶屋へようこそ（熊川宿おもてなしの会）



勘兵衛茶屋自慢の葛ようか

川宿は、鯖街道の宿場町として発展してきました。そして今も変わらず鯖街道あつての熊川宿です。そこで、今後も鯖街道の各地域との交流をさらに進めていくことが重要であるとして、八月二六日、「鯖街道」をテーマに活動している団体が集まつてシンポジウムを開催することになりました。集まつたのは、鯖街道の始点である小浜、滋賀県の保坂、朽木、京都府の一乗寺、鯖街道の終点である出町、そして地元熊川の計六団体。パネルディスカッションでは、京都府立大学の宗田好史先生の司会により六団体の代表の方がそれぞれの地域資源や活動を発表し、どのように各地の活動を結びつけていくかについて話し合いました。その後、街道に横を組み、「鯖街道縦踊り」と

ーは京都の二階部分が畠井家ノー、木造の
て利用し、特産の葛を使つた葛ようかんを看
板メニユーとして「勘兵衛茶屋」を営業して
います。勘兵衛茶屋のコンセプトは「和風・
手作り・おもてなしの心」お店の雰囲気や接
客の在り方などにも会員のこだわりがありま
す。葛ようかんは、京都からUターンされた元大
和菓子職人であつた方の発案による一品です。
会員が当番で、調理、接客に当たり、来訪者
との交流も進み、好評をいただいています。勘
兵衛茶屋には、自信と誇りをもつて活動して
いる住民の姿があるのです。

据えながら着実に事業を開拓してきました。美化活動、広報誌の発行、工芸品の開発、語り部の養成、まちづくりフォーラムの開催などその活動は多彩です。平成一〇年には、京都から伝わった「てっせん踊り」を八〇年ぶりに復活させ「熊川宿伝統芸能保存会」が発足しました。平成一四年には、白石神社の山車と見送り幕を四〇年ぶりに復元させました。また、伝建による修理事業が始まると技術者が

選定から一〇年 熊川宿の新たな取組

新たな取組

れる用水が音を立てて勢いよく流れています。

集まり一熊川宿町並み保存伝統技術研究会が発足しました。平成二年から始まつた秋の観光イベント「熊川いっぷく時代村」は、若手を中心とした実行委員会が盛り上げています。



鰐街道交流シンポジウム



麟街道综治

熊川にとって、平成一八年は、選定一〇年という記念すべき年であるとともに、節目の年でもありました。この一〇年の間、電線の地中化、民家の修理などで景観は大きく変わりました。道の駅ができるからは観光客が大幅に増えました。その反面、少子高齢化は進み、空き家が増加しました。この変化は住民の生活環境に大きな影響を与えて います。そこでこれらの課題に対応するため、約一年の議論を経て、熊川区は「第二次熊川まちづくりマスター プラン」を策定し、今後のまちづくりの方針と具体的な方策を定めました。

プランの策定から九か月が経ちましたが、既にプランに基づく取組が始まっています。まず、旧逸見勘兵衛家を活用した住民によるおもてなし事業です。熊川の来訪者は年々増え、いつぶくできる場所や来訪者と住民が交流できる場所がないという感想が聞かれるようになりました。そんななか、マスター プランの会議の席上、自分たちの手でいつぶく処をつくりたいという意見が出されました。さっそく、全区民から参加者を募り、「おもてなし研修」と

(若狭町文化財室主事) 岡本潔和



風の通り馬場

体の問題として勉強会を実施しました。また、地区的な景観に重要な生垣を枯らしてしまった害虫が発生すれば、会費として徴収した運営資金で薬剤を購入し、薬剤散布を実施しています。その他、地区内の馬場（通り）の愛称を募集して「風の通り馬場（かぜんとおいばば）」と名付けて標柱を設置するなど、保存会が主体となつた活動に行政等を取り込んで活動するスタイルを確立させています。

保存地区に残る伝統芸能

保存地区には、疱瘡踊（昭和三八年鹿児島

県指定）という郷土芸能も伝承されています。この踊りは、女性だけで踊られ、黒紋付の盛装に手拭を被り、太鼓打ちは、帶を派手な蝶結びにして赤い襷を掛け陣笠を被ります。疱瘡は、流行すると困る病気であるため、発生しないでほしいと願うのが一般的ですが、「疱瘡の神様来てください」というがとうございます。踊りをお見せしますので、見終わったら次の場所へ立ち去ってください」という趣旨で踊られています。記録では、寛政二年（一七九〇）の天然痘流行時から踊られ、現在では、祭事や県内のイベントで踊られることがほとんどになっています。男性上位といわれている鹿児島県



疱瘡踊の練習風景

において、女性が舞台に立て踊り、男性は世話役として支える形態は非常に珍しく思われますが、戦時に表舞台で活躍する男性が疱瘡の病にからぬよう、女性が疱瘡の神様に接して犠牲になつていたと考えれば、古くから相互に支え合いの地区を守つていこうとするスタイルの確立をこの踊りから想像することができるのではないか。

入来文書ゆかりの地として守られることに

入来麓を守る

薩摩川内市は、鹿児島県北西部に位置し平成一六年に一市四町四村の市町村合併によって誕生しました。

保存地区は、市内のほぼ中央部に位置し、平成一五年一二月に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

中世山城である史跡清色城跡（平成一六年九月国指定）を背

に、ほぼ同時期に成立したと思われる麓集落を基盤と

して、近世に整備された玉石垣群による街路構成と地割りがよく残されており、これらの玉石垣群と生垣に囲まれた緑化環境の中で整然としたたたずまいに武家



清色城跡と入来麓



伝建地区を案内する保存会

住宅が配置されています。
入来文書ゆかりの地

保存地区の区割り等が今日まで大きく変更されることなく残してきた要因に入来文書の存在が挙げられます。

入来文書は、宝治元年（一一四七）に相模

伝建制度の主役「保存会」

重要な伝統的建造物群保存地区に選定されからこの一二月で四年になります。同時に、地区を支える保存会も結成四年目を迎えます。現在、保存会の存在なくしては、伝建制度の円滑な運用ができないといえるほど、大きな存在となり、地元と行政とが協働したまちづくりが実施されています。

とにかく、やる気のある保存会。できるだけ行政に頼らず情報収集を行い、民間団体等からの補助を受け、活動の幅を年々広げています。昨年は、地元建築士会と協働で住宅耐震に関するワークショップを開催し、地区全

国（現在の神奈川県）から下向してきた渋谷氏を起源に、明治維新までの約六〇余年間の入来院氏の動向が記され、日本中世史の解明に最も重要視されてきました。地区の中心を南北に通じ、現在は、市道となっている道路拡幅の問題が発生したとき、この「入来文書」とともに保存されてきた麓集落を守るうと、全国の研究者たちによる署名活動が起り、本地区は、今まで保存されることとなりました。現在では、東京大学史料編纂所所有となっていますが、この「入来文書」の存在が清色城跡の国指定と麓集落の重要伝統的建造物群保存地区選定に大きく寄与しています。



三町伝統的建造物群保存地区・上二之町の雪またじ



火伏せの神・秋葉さまの小祠は地区内各所に見られる

屋台をもつ屋台組だけでなく、文政年間に屋台が創建され、明治初年の大火で灰燼に帰した八幡祭の船鉢台組のように、現在屋台はもたないものの、屋台組の組織は受け継がれている屋台組もあり、祭礼は代車で行列に参加したりして、高山の祭りを支えています。また町屋の密集していた地区では、火災の恐れが大きく、古くから火伏せの神である秋葉神への信仰が強かつたため、今でも伝建地区内のところどころには秋葉さまの祠が祀られています。

定期的に秋葉さまに灯明を捧げたり、秋葉さまの祭礼に合わせて消防訓練が行われる例や、家ごとに秋葉さまのお札が回ってくる習慣が続いている所もあります。

冬は雪またじの季節です。またじとは飛騨のことばで始末をする意味で、高山は内陸性の気候で寒暖の差が激しく、雪も多く一冬に何回も屋根の雪降ろしが必要な年もあり、その始末が大変です。道に積もった雪は、そのままだと凍つて堅くなってしまうため、競うようにしてまたじをします。家の前の雪は、それぞれで始末することとされており、高山の伝統的な町並みでは、道の両側に側溝が設けられており、除雪用にも使われてきました。



昭和30年代の箱雛

箱雛は、昭和三〇年代まで作られていましたが、昭和四〇年代になると七段飾りが主流となり、作られなくなりました。現在は市内に九州一の雛人形の生産量を誇る会社「八女人形会館」があります。近年、町並みの住民などからの提案を受け、この企業により「平成の箱雛」が復原されました。現代の雛人形が、桐の箱に入っています。飾りつけや出し入れが簡単で、収納も場所を取りません。ぜひ一組お求めになつてはいかがでしょうか。

町の人々の思い

八女福島地区での雛祭りのイベントは、大分県日田市の豆田地区との交流の中で、雛人形の生産地である八女でもぜひ町並みでの雛まつりをという勧めで、平成一〇年三月から始まりました。

最初は予算もつかず手探りでしたが、町並みの旧家の一軒一軒をたずね、昔の「箱雛」を土蔵の奥から出す手伝いをして、表に展示してもらいました。

このことが町の方々にとっても、足元の文化を見直すきっかけになつたようです。一ヶ月間自宅を公開することはたいへんな負担だと思いつつですが、お客様に八女の文化を見ても嬉しい喜んでいただきたい、町のにぎわいに貢献したいという思いで公開されています。

さまざまなイベント

「ぽんぱりまつり」の実行委員会は、市の商工観光課が事務局となり、町並みのまちづくり団体のほか、商店街や観光協会、婦人会等の人たちによって構成されています。

期間中は、沿道に桃の花や菜の花などを竹筒に飾り、市内の園児たちがお雛様・お内裏様の格好で町並みを行列する「お雛様パレード」、着物を着て町並みを歩いてもらう「和服でめぐる八女のまち」、十二單衣と東華姿というお雛様

の衣装で地区内の神社で挙げる本物の結婚式など、まつりを楽しく盛り上げるために、さまざまなイベントを開催しています。

町並み案内



お雛様の衣装で結婚式後人力車でパレード

訪れるお客様は、各地の雛祭りを見て回るバスツアーの方が多く、観光協会のボランティアガイドが案内します。人手が足りず、市の商工観光課職員が急きよ助つ人することもツアーハウスは滞在時間が短いが残念ですが、最後に「今日は時間が足りなくて町並みの三分の一もご案内できませんでした。次はゆつくりご家族・お友達と遊びにきてくださいね」と再訪をお願いします。「また来たい」と思つてもらえるような魅力を伝え案内を心がけています。

最近、町家を生かした雰囲気のいい食事処やカフェが少しづつ増えてきました。町並み案内の中でも希望者が増え、おもてなしの勉強中です。古い町並みを訪れた方には、ゆっくり過ごして、いろんな魅力を深く味わつてもらいたいと思います。



八女福島の町並み

八女福島地区の概要

八女福島地区は江戸時代から続く商家町で、伝統工芸の仮壇・提灯の工房・店舗も多く、八女市の中心市街地に位置します。

八女生まれのお雛様を訪ねて 「雛の里・八女ぽんぱりまつり」

福岡県八女市

平成三年ごろから地元の町並み保存の取組が始まわり、平成七年から国土交通省の事業を活用して町家の修理補助を始め、町並みを八女市の重要な文化・観光資源として保存整備を進めています。重要伝統的建造物群保存地区には平成一四年に選定されました。

まちじゅうで雛祭り

三月の一ヶ月間、伝統的町並みと商店街で「雛の里・八女ぽんぱりまつり」が開催され、各戸・商店の軒先・店先約一〇〇か所に八女の郷土雛「箱雛」をはじめとするお雛様が飾られます。軒先にブンクの提灯が下がつているところがお雛様を飾つている目印で、すべて入場無料。来訪者はお雛様を訪問しながら、ゆっくり歩いて町の中をめぐります。

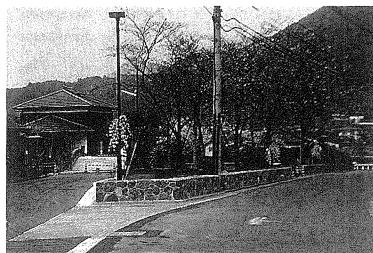
ふだんは一般の住宅で外からしか見えない町家も、このときは中まで入ることができ、太くて黒光りする立派な梁・柱や、美しいお座敷や中庭を見ることができます。



左: 平成の箱雛 右: 地区内の提灯屋

「箱雛」は、八女地方独特の飾り方をするお雛様で、男雛と女雛がそれぞれ杉の箱に入っています。箱の前面に蓋をすることができるようになっています。江戸後期から八女福島地区の提灯・灯の止め具、衣装は仮具に敷く金網が使われ、台座には提灯の枠と同じ蒔絵風の絵が描かれています。

八女で作られた箱雛は、九州一円の家庭に飾られ、今も各地に残っています。初期のものは享保風の面長で、戦中のものは素材が質素になるなど時代の変遷も見て取れます。



佐野至氏制作の版画



目鏡橋の石壠

④官民共働事業
当時藩の財政は火の車であり、工事費八〇貫目中、三〇貫目は大庄屋平田治部右衛門が出銀し、官民共働で行われています。

整備方針および整備工事

整備に当たっては、地元において目鏡橋整備検討委員会を立ち上げ、地元コミュニティの活性化および整備調整を図るために延べ四回の会議を行いました。専門的見地からは、朝倉市歴史的景観審議会、県文化財保護課のアドバイスを得ながら進めました。

①整備方針策定

整備方針策定に当たっては、現況調査および藩政期の古地図が現存するため、これらを参考に基本設計をし、発掘調査の成果を基にした。橋の内部構造は、下層部は栗石、上層部

②官鏡橋物語(白翁老隨筆より)

このたび、朝倉市合併一周年に際し、秋月伝統的建造物群保存地区内に架かる県指定有形文化財目鏡橋および目鏡橋周辺の整備工事を行いました。一連の作業工程および地元住民のかかわり等を紹介します。

目鏡橋の特徴



秋月振興会主催の渡り初め

①秋月周辺で採れる硬い白御影石を使用
江戸期の御影石造りの眼鏡橋は他に例があります。

②優れた意匠
護岸高が低く川幅は広いのですが、川の流れが速いため一径間とし、径間が護岸高の三、六倍にもなる扁平形となっています。また、橋詰には段差が各一段あります。車力等も通れるよう低い段差(約7cm)となつており、河床の石量や周囲の自然と相まってみごとな景観となっています。

③強固な護岸

眼鏡橋を設ける場合護岸がしっかりとしてい有必要があります。これは、上からの重力を真下ではなく横、つまり護岸で支える構造になつていているためです。そこで護岸には城の石垣でも使用されている強固な算木積みが施されています。



桜の目鏡橋

は土で表面石量の高さ調整がなされていました。同様の工法で修理しました。

(2)道路工事

藩政期の枠形がイメージできるよう路面表示し、路面高道路幅員を復原しました。工事途中江戸期と思われる水路が出土したため、いつたん工事を中止して発掘調査を行い、その結果を踏まえ、石積水路をモニュメントとして生かす整備を行いました。

(3)その他

ガードレールについては石積みで修景し、史跡説明板は有田焼陶板としています(昭和五四年より使用)。

最後に

今回の整備は、秋月地区目鏡橋周辺整備検討委員会をはじめとする多くの方のご協力で無事竣工しました。地元の方々は「自分たちの意見が工事に反映され、目鏡橋および公園に愛着がもてるようになった。自分たちの公園としていつまでも美しく使っていただき」と言っています。また、平成一九年三月三十日地元秋月振興会主催(約100名出席)で二〇〇年ぶりの渡り初めが盛大に行われ地元の歴史遺産の一つに光があれました。

これからも地域の人々が愛着や誇りをもてるような整備を心がけたいと思います。

100年ぶりの渡り初め 目鏡橋および周辺整備事業の現場から

福岡県朝倉市